

## 自己認識の方法

——総合的方法と分析的方法——

北岡 崇

### 一 二つの方法

『プロレゴメナ』(一七八三年)の中に、「プロレゴメナ」の「一般的問題」として、「い、つ、たい、形而上学は可能であるか？」という「批判的問題」が掲げられている。この問題は、先に、『純粹理性批判』第一版(一七八一年)で取り組まれていたものである。このことは、第一版序文で、「批判」は、「形而上学一般の可能性ないしは不可能性の決定、またこの形而上学の諸源泉ならびに範圍と諸限界との規定(Bestimmung)」に携わるとされていることからも明らかである。両著作のいずれにおいても、カントは、「独断論」にも「懷疑論」にもくみせず自らの哲学的思索にもとづき右の「批判的問題」に取り組むことにより、「学としての地位を維持しうるような形而上学」が可能か否か、また可能ならどのような形而上学が可能か、等、を明らかにしようとする。そして、この作業を介して、いまだかつて存在したことのない「学としての形而上学」を新たに構築し、「理性に永続的な満足を与える」ことをめざしている。しかし、両

著作のいずれも、「学としての形而上学」の構築と「理性」の「永続的な満足」とを究極的な目標とするとはいえず、各々の著作における思索は、それぞれ異なる「方法的手続き」に従う。つまり、『純粹理性批判』では総合的方法が、『プロレゴメナ』では分析的方法が、「批判的問題」に取り組む思索の歩みを規定する。だがしかし、これら二つの方法がともに右の究極的な目標を射程内におさめていくわけではない。すなわち、思索をその究極的な目標へと導くに十分な二つの方法が並存しているのではないのである。だが、このことの確認はすでに本稿の結論に属することである。

ともあれ、「批判的問題」に取り組む思索の歩みを規定する二つの「方法的手続き」を性格づけるカントの記述をみてみよう。『プロレゴメナ』第四節に次のような記述がある。

「『純粹理性批判』において、私は、この問題に総合的に取りかかった。すなわち、純粹理性そのものを探求し、この源泉そのものにおいて、理性の純粹な使用の諸エレメントならびに諸法則を、諸原理に従って規定(bestimmen)しようとしたのである。この仕事は困難なものであって、体系のうちへと次第に立ち入って思索する

決然たる読者を必要とする。そしてその体系とは、理性そのもの以外には、まだ何ものをも所与 (gegeben) として基礎におかず、従って、どのような事実 (Factum) にももとづかず<sup>(8)</sup>に、認識をその根源的な萌芽から展開しようとするものである」。

「これに反して、『プロレゴメナ』は、予備 (Vorübungen) であるべきものである。それは、一個の学そのものを述べるというよりはむしろ、できればその学を実現するために、われわれがなさねばならぬことを示すべきものである。それ故、『プロレゴメナ』は、すでに信頼しうるものとして知られている何か或るもの (etwas) にもとづかなければならない。われわれは、そこから信頼をもって出発し、まだ知られていない諸源泉へさかのぼることが出来る。そして、これら諸源泉の発見は、われわれの知っていたものを説明するばかりでなく、同時にまた、ことごとく同じ諸源泉から発源する多くの認識の範囲をも示すであろう。それ故、『プロレゴメナ』の、とりわけ、将来の形而上学に備えるべき『プロレゴメナ』の、方法的手続きは、分析的であるということになる<sup>(9)</sup>」。

これらの記述によれば、総合的方法に従う思索にとっては、「理性」が、しかもこの「理性」のみが、「所与」として前提される。もちろん、「理性」なしではおよそ思索の遂行はありえぬという意味でなら、分析的方法に従う思索にとっても「理性」が前提される、と言える。しかし更に、分析的方法に従う思索にとっては、この思索が依拠すべき不可欠な出发点として、「すでに信頼しうるものとして知られている何か或るもの」が前提される。それぞれの前提が存立しなければ、それぞれの方法が思索において実現されると言うことはありえない。

とはいえ、一般に語りうることであるが、前提としてその存立の

要請されるものが、更に実際にも存立するものであるとはかぎらない。また、前提の存立が確認されずに放置されたままで、その前提に依拠した思索がなされるなら、その思索は、たとえ首尾一貫したものであるにせよ、その思索の前提と同じように不確かなものである。それ故、われわれは、思索に対して、単なる首尾一貫性を越えて、存立する事態との一致ということを期待するなら、そしてまた、このような期待を抱きつつ、各々の方法を実現する思索の歩みを実際に逐次追跡することを試みようとするなら、この追跡の端緒として、各々の思索の前提の存立がカントによってどのように捉えられているのかということ、各々の方法について考察する必要がある。

このような考察の一環を成す本稿は、『プロレゴメナ』第四節・第五節に見られる、各々の思索の前提に関する若干の記述を批判的に考察することにより、まず第一に、総合的方法に従う思索の姿のスケッチを試み、次に、カント自ら必ずしも明確には自覚していないと思われる、分析的方法の多義性を明らかにする。更に、以上の考察を踏まえ、カント自らはっきりと自覚していた、分析的方法の限界、あるいは総合的方法に対する分析的方法の依存という局面を、各々の意義における分析的方法に即して明らかにする。かくして、思索の究極的な目標——「学としての形而上学」の構築及び「理性」の「永続的な満足」——を射、程内におさめると期待することのできる「方法的手続き」としては、ただ一つ、総合的方法だけが残存する、という結論が獲得されるはずである。

## 二 総合的方法と理性

先の記述によれば、『純粹理性批判』の思索は総合的方法に従う。すなわち、「理性」のみを前提し、この「基礎」に立ち、認識一般の「源泉」である「純粹理性」そのものを探求する思索である。<sup>(11)</sup>ところが、その当の思索も、「理性」による思索に他ならない。それ故、総合的方法を実現する思索は、「理性」が「理性」のみを前提し、この「基礎」に立ち、認識一般の「源泉」である「純粹理性」を探求するところに成り立つ、と言える。<sup>(12)</sup>『純粹理性批判』第一版は、このような思索を、「理性」の「自己認識」<sup>(13)</sup>と呼んだ。その際、形而上学的認識の可能性をめぐる「批判的問題」に対する解答も、「理性」の「自己認識」に託されていた。<sup>(14)</sup>確かに、「理性」は認識一般の「源泉」であるが故に、「理性」の「自己認識」が完成すれば、形而上学的認識が可能か否か、また可能ならどのような形而上学的認識が可能か、等、の問題が答えられることになるだろう。

さて、総合的方法を実現してゆく思索が「理性」の「自己認識」において成立するなら、その思索の唯一の前提とされた「理性」の存立は、特有の状況に巻き込まれているはずである。つまり、一方では、「自己認識」を遂行するのは「理性」であるが故に、「理性」はすでに「所与 (Gegeben)」として存立すると認められねばならないが、他方では、「理性」の「自己認識」こそがまさしくめざされている認識であるが故に、その存立する「理性」はいまだそれ自身完全には解明されていない、むしろこの解明は課せられて (aufgegeben) いる、という状況である。かくして、われわれは、総合的方法を実現してゆく思索の記述である『純粹理性批判』の中で、その思索の唯一の前提なる「理性」の存立がどのように捉えられているのかという問いに、概略的にはあるが次のように答えることができる。

すなわち、「理性」は、『純粹理性批判』を遂行する思索において自己を表現するものとして捉えられている。しかも、この「理性」の自己表現は、思索の二つの側面に即しておこなわれる。

まず第一に、「理性」は、思索する働きそのものに即して己れ自身を表現する。そもそも思索とは、思索する働きそのものの中で、思索を廃棄することはできないという本性をもつ。思索がその本性上このように自己指定しつつ (selbstsetzend) 遂行される以上、思索において働く「理性」は、その思索に即して己れ自身を表現しないわけにはゆかない。この事態を否定することは、全く「理性」などは存在しないということをして「理性」によって証明しようと望むのと同様に不合理である。それ故、総合的方法を実現しつつある思索は、その唯一の前提であり「基礎」である「理性」を他所から与えられる必要はない。「理性」は、右の思索そのものに即して「所与」である。この意味でなら、思索者は、「やはり理性はいつでもわれわれにとって現前 (gegenwärtig) している」と語りうる。<sup>(15)</sup>

しかし、更に第二に、「理性」は、総合的方法を実現しつつある思索を介して解明されたそのつどの姿においてその存立が確認されてゆくものである。つまり、『純粹理性批判』の中で、「理性」が、純粹直観、純粹悟性概念、等の働きとして解明されてゆくそのつどにおいて、「理性」の存立の確証が進められてゆく。さしあたり思索の働きそのものに即して自己自身に「現前」するにすぎない「理性」が、「理性」の純粋な使用の諸エレメントならびに諸法則」を規定してゆく自己規定 (Selbstbestimmung) なうし「自己認識」の思索によって、感性、悟性、等、認識の能力として確認されることになるのである。

とはいえ、総合的方法を実現しつつある、「理性」の「自己認識」

という思索は、少なくとも『純粹理性批判』の完結以前には完成しない。従って、その思索の唯一の前提にして「基礎」であるとされた「理性」が、その思索の開始、つまり『純粹理性批判』の開始、「理性」の「自己認識」の開始に先立って、すでに完全に確認されて存立するということは決してありえない。しかしまた同時に、それにもかかわらず、その思索の総合的な歩みの中で、その思索の唯一の前提の存立が、確実なものとして認識されるに至ることの可能性までがすでに否定されているというわけでもない。それが確認されぬものとしてとどまりつづけると断定することは、まだできないのである。それ故、総合的方法を実現しつつある思索の場合は、この思索の歩みのそのつどの追跡に先立って、この思索の成果の価値をあらかじめ見積もることができない。しかしまた、それ故にこそ、総合的方法の場合、カントの言う「体系のうちへと次第に立ち入って思索する決然たる読者」<sup>(18)</sup>であるなら、思索の総合的な歩みの果てに、この思索の唯一の前提の存立が完全に確認されているのを見ることができるとも、あるいは期待を保持することができるとも、

われわれは、カントの思索の歩みを逐次追跡する作業の端緒として、その思索の前提の存立をカントがどのように捉えているかという点を考察する必要がある、と述べた。しかし、総合的方法の場合には、この端緒の考察が、少なくとも『純粹理性批判』の完結に至るまでのカントの思索の歩みを実際に追跡してみることという作業を介さずしては完成されえぬということが明らかにになった。総合的方法の場合、この方法を実現する思索が完成する境地以外のいかなる境地にも、右の端緒の考察の完成は期待できないのである。

『プロレゴメナ』第四節・第五節の記述へと考察を限定する本稿

で、総合的方法に従う思索の前提の存立について語りうることは、以上のようなものである。

七六

### 三 分析的方法と純粹な諸「学」

総合的方法に従う思索は、「理性」の「自己認識」として遂行されるものであった。「理性」の「自己認識」という言葉を用いるなら、分析的方法に従う思索も、「理性」の「自己認識」をめざす、と言える。というのは、思索の分析的な歩みとは、「所与なる諸学の諸源泉を理性そのもののうちに求め、そのことによって、何か或るものをア・プリオリに認識する理性の能力をその所業 (Tat) そのものを介して探究し、測定する」という課題に「理性」によって十分に答えることをめざすからである。思索の歩みを規定する方法が総合的方法であれ分析的方法であれ、その思索が「理性」の働きであることには変わりない。その意味でなら、いずれの方法に従う思索にとっても「理性」が前提される。また、いずれの方法によっても、思索に対して、「理性」の解明に向かうようにとの指示がなされている。しかし、総合的方法に従う思索と分析的方法に従う思索との間には、相違がある。前者の思索が「どのような事実にもとづかない」思索であるのに対し、後者の思索は、自ら依拠すべき不可欠な出発点として「すでに信頼しうるものとして知られている何か或るもの」を前提するという相違である。この「何か或るもの」は、右の引用箇所では、「所与なる諸学」あるいは「理性」の「所業」と呼ばれている。

分析的方法に従う思索が依拠すべき、この思索に特有の前提とされた「すでに信頼しうるものとして知られている何か或るもの」と

は具体的には何を指すのか?——この点の考察が、われわれを、分析的の方法の多義性の発見へと導いてゆく。

「すでに信頼しうるものとして知られている何か或るもの」は、ひとまず、『プロレゴメナ』第四節で、「純粹数学及び純粹自然科学」の認識と同一視される。

カントによれば、「純粹数学及び純粹自然科学」の認識とは、「争う余地のない、ア・プリオリな総合的認識」であり、しかも、「現実に所与なるものとして存在している (wirklich und gegeben sein)」認識である。この故にこそ、それは、「すでに信頼しうるものとして知られている何か或るもの」とみなされる。しかし、言えるのはそれだけではない。更に、われわれは、カントの記述にもとづき、「すでに信頼しうるものとして知られている何か或るもの」の具体的内容はひとまず「純粹数学及び純粹自然科学」の認識へと限定されている、と解釈できる。というのは、カントは、「純粹数学及び純粹自然科学」の認識から出発し、この「所与なる」認識が可能なのは「いかにして (wie)」なのかと問う問題に答えることにより、この認識を「可能ならしめる原理」、すなわち「理性」を捉え、翻って、その「理性」から「他の〔純粹数学及び純粹自然科学〕ではない」という意味<sup>20</sup>、すべての認識の可能性<sup>21</sup>を「導出できる」と展望しているが、実際にそのような「導出」がなされるなら、その時、「いったい形而上学は可能であるか?」という「批判的問題」も解決されるはずだからである。そして、このことは、カントの記述が、右の「批判的問題」に分析的方法に従って答えようとする際、その思索の依拠すべき出発点として、「純粹数学及び純粹自然科学」の認識を前提すれば十分であるという思想を潜在的に含意している、ということの意味するからである。かくして、われわれは、

『プロレゴメナ』第四節では、「すでに信頼しうるものとして知られている何か或るもの」とは、まさしく、「争う余地のない、ア・プリオリな総合的認識」として「現実に所与なるものとして存在している」、「純粹数学及び純粹自然科学」の認識のことである、と解釈できる。

しかし、『プロレゴメナ』第五節には、分析的方法に従う思索が依拠すべき不可欠な出発点として前提されるものについて、右に述べた第四節の思想とは異なる思想が表明されている。すなわち、たとえ「学としての形而上学」が可能であるとしても、分析的方法に従ってそのような学をめざしさかのほろうとするなら、その思索が依拠すべき出発点として、「純粹数学及び純粹自然科学」の認識を前提するだけでは不十分である、とする思想である。第五節には、例えば、次のような記述が見られる。

「しかし、これらの現実的な、同時にまた根拠のある、純粹なア・プリオリな認識〔純粹数学及び純粹自然科学の認識、という意味〕から出発して、われわれの求める可能的なア・プリオリな認識、すなわち、学としての形而上学をめざしさかのほるためには、われわれは、次のことを必要とする。つまり、学としての形而上学の誘因となるもの、それも、その真理性に疑わしい点がないわけではなく、単に自然的に所与なるア・プリオリな認識として、学としての形而上学の基礎にあるもの、それを編集したものが、その可能性を何ら批判的に究めることもなく、通常すでに形而上学と呼ばれているもの、一言で言えば、こうした学に向かう自然素質、これを、われわれの主要問題に含める必要がある<sup>22</sup>」。

この記述に対応して、『プロレゴメナ』で答えられるべき問題として、「一、いかにして純粹数学は可能であるか?」「二、いかに

して、純粹自然科学は可能であるか? という二つの問題にならび、更に、「三、いかにして一般に形而上学〔学としての形而上学に向かう自然素質、あるいは、自然素質としての形而上学の意味〕は可能であるか?」という問題が立てられる。ここに、分析的方法を實現する思索が依拠すべき出発点として、「自然素質としての形而上学」が加えられ前提される。

しかし、それだけではない。更に、第四の問題として、カントは、他ならぬ「学としての形而上学」について、「四、いかにして学としての形而上学は可能であるか?」という問題を立てる。

事実、『プロレゴメナ』は、右の四つの問題に順次答えてゆくという構成をとっている。すなわち、分析的方法に従う思索が依拠する出発点として前提されるものに関して、『プロレゴメナ』第四節には見られぬ思想を含みもつ第五節の思想が、『プロレゴメナ』の構成を決定しているのである。

しかし、第三の問題の場合、第五節で、その問題を立てる「必要がある」と語られるだけで、何故「必要がある」のかの説明は一切なされていない。ただ事実上、第三の問題がはじめの二つの問題に並立せしめられ、更にこの並立に対応して、これら三つの問題の各々に携わる『プロレゴメナ』の三つの篇が並列 (Koordination) 的に配置されているだけなのである。また、第四の問題に、たゞは、「必要がある」とすら語られることなく、ただ事実上、前の三つの問題に並立せしめられているだけである。

これら第三及び第四の問題を立てざるをえなくする理由は、並列 (Koordination) 的な構成をとる『プロレゴメナ』の中によりも、むしろ、Subordination の秩序によって構成されている——そして、総合的方法によってではあれ、結果的には、それら四つの問題に

解答を与えようとする——『純粹理性批判』の中にこそ見い出されると推測されよう。とはいへ、『プロレゴメナ』第四節・第五節の記述へと考察を限定する本稿では、ただ事実上これら第三及び第四の問題がはじめの二つの問題に並立せしめられているということを確認しうるのみである。だが、このような確認とこの確認を可能にする右のような考察領域の限定によって、かえって、カント自らはずきりと自覚していた、分析的方法の限界、あるいは総合的方法に対する分析的方法の依存という局面が、明確に捉えられることになる。

節をあらため、右に述べた第三及び第四の問題を考察し、『プロレゴメナ』の思索を導く分析的方法の多義性を明らかにしよう。

#### 四 分析的方法の多義性

分析的方法に従う思索の依拠する出発点として前提される「すでに信頼しうるもの」として知られている何か或るもの」とは、『プロレゴメナ』第四節では、すなわち、「争う余地のない、ア・プリオリな総合的認識」と言われる「純粹数学及び純粹自然科学」の認識のことであった。しかし、第五節では、右の認識とならび、「その真理性に疑わしい点がないわけではない、……所与なるア・プリオリな認識」と言われる「自然素質としての形而上学」が、「すでに信頼しうるもの」として知られている何か或るもの」として選出されていた。

確かに、カントによれば、「理性の自然素質としての形而上学は現実存在している」。更に、カントは、形而上学に関する「多くの試みが、たとえ失敗するにしても、つねにさげられない」し、この

ことは「人間の理性の本性によって万人に提出されている」課題に促されてのことである、と語る。従って、カントによれば、「自然素質としての形而上学」は、すでに「事実」として存立する。また、存立の事実性が認められるものであるなら、そのものを、「すでに信頼しうるものとして知られている何か或るもの」とみなすことも、ある意味においては可能である。しかし、そのように、「自然素質としての形而上学」を、その事実性にのみ依拠して、「すでに信頼しうるものとして知られている何か或るもの」とみなすなら、この時、この「何か或るもの」は、これが「純粹数学及び純粹自然科学」の認識と同一視されている時に較べて一層広く緩い意味へと解釈しなおされていることになる。すなわち、『プロレゴメナ』第四節から第五節への展開の中で、「争う余地のない、ア・プリオリな総合的認識」のみの「事実」から、「その真理性に疑わしい点がないわけではない、……所与なるア・プリオリな認識」をも含む「事実」へと解釈しなおされているのである。

分析的方法に従う思索が依拠すべき出発点を指示する語句、つまり、「すでに信頼しうるものとして知られている何か或るもの」という語句の二義性が明らかになった。また、この二義性に対応して、分析的方法そのものに二つの意義の存することが明らかである。すなわち、第一の意義における分析的方法とは、「いったい形而上学は可能であるか？」という「批判的問題」に十分な解答を与えるために思索が依拠すべき出発点として、「純粹数学及び純粹自然科学」の認識を前提すれば十分であるとするものであり、第二の意義における分析的方法とは、思索が依拠すべき出発点として更に「自然素質としての形而上学」を前提する「必要がある」とするものである。

更に、いま一つ、第三の意義における分析的方法を提示しよう。『プロレゴメナ』第五節でカントは、『プロレゴメナ』で答えられるべき第四の問題として、「いかにして学としての形而上学は可能であるか？」という問題を立てていた。しかし、この問題の形式は、次に紹介する、『プロレゴメナ』第四節に見られる、問題の形式に関する思想と矛盾する。カントは、「現実にも所与なるものとして存在している」「純粹数学及び純粹自然科学」の認識の「原理」を問う問題の形式について、述べている……。

「われわれは、それが可能であるか否か (ob) を問う必要はなく (なぜなら、それは現実に存在しているから)、ただ、それがいかにして (wie) 可能であるかを問うべきではない」。

「自然素質としての形而上学」の場合も、これは、「争う余地のない、ア・プリオリな総合的認識」としてではないにせよ、「現実に存在している」「所与なる」認識であるという一点においては、純粹数学や純粹自然科学と同様である。それ故、問題の形式に関する右の思想からすれば、これら三者については、「いかにして (wie) 可能か？」と問うのがふさわしい、と言える。

しかし、「学としての形而上学」は、「現実に存在している」ものではない。実際カントは、『プロレゴメナ』第四節では、そのような「学としての形而上学」について、「いかにして (wie) 可能か？」を問うことはできず、まず「可能か否か (ob)？」を問うべきであると考へ、「プロレゴメナの一般的問題」すなわち「いったい形而上学は可能であるか？」という「批判的問題」を掲げたのである。何ら事実性を認められていない「学としての形而上学」を、分析的方法に従う思索が依拠すべき出発点として前提するかのような形式をもつ、「いかにして学としての形而上学は可能であるか？」

という問題は、われわれが考察したかぎりでの、分析的方法をめぐ  
るカントの思想からは生じようのない問題である。実に、この問題  
は、われわれが明らかにした二つの意義のいずれとも異なる第三の  
意義における分析的方法と結びついて生じているのである。この問  
題を立てるための伏線を敷くかのように、カントは、『プロレゴメ  
ナ』第五節で次のように述べている。

「分析的方法が意味しているのは、求められているものから、あ  
たかもそのものが所与 (gegeben) であるかのように出発して、そ  
のもとでのみその求められているものが可能となる諸条件へさかの  
ぼることだけである」。

分析的方法がこのようなものであるなら、この方法を実現する思  
案が、「求められているもの」である例えば「学としての形而上学」<sup>(39)</sup>  
を「あたかも所与であるかのように」想定した上で、それについて、  
「いかにして (wie) 可能か？」と問うことにより、その想定された  
「学としての形而上学」が可能であるための「条件」である「理性」  
へとさかのぼるといふ道筋を歩むということもありうるであろう。  
そして、その道筋の端緒に、「いかにして学としての形而上学は可  
能であるか？」という問題が、位置づけられる。

もちろん、このような分析的方法は、先に考察した二種の分析的  
方法のいずれとも異なる。<sup>(40)</sup>先に考察した二つの意義のいずれにおけ  
る分析的方法も、等しく、「現実が存在している」「所与なる」「事  
実」を思索の依拠すべき出発点とし、ここからこの「事実」の「原  
理」・「源泉」である「理性」の解明へと思索を進めるよう指示して  
いた。こうして捉えられる「原理」・「源泉」は、「事実」から出発  
する思索によって捉えられるものであるが故に、捉えられると同時に  
に、現実性をもつものであることが明らかである類のものである。

ところが、第三の意義での分析的方法は、「所与」と想定された、  
しかし実際にはその現実性も可能性もまだ不確かなものからその  
「条件」へと思索を進めるよう指示する。たとえこの指示に従って、  
例えば「学としての形而上学」の「条件」である「理性」の姿が描  
かれたとしても、その「理性」は、仮説的に想定されたものから出  
発する思索によって描かれたものであるが故に、すでにそれだけで、  
現実性をもつものであることが明らかになっていくわけではない。  
出発点に想定された「学としての形而上学」を実際に可能ならしめ  
る「理性」というものももし存立するなら、その「理性」がとらね  
ばならない姿が描かれたまでのことである。従って、ここに描かれ  
た「理性」から更に進み、想定された「学としての形而上学」の実  
際の可能性や現実性を証明するためには、この「理性」の姿の描  
出にまで達した思索の分析的な歩みとは独立に、ここに描かれた「理  
性」の現実性を、「理性」自身に即して証明しなければならぬ。  
分析的方法に従う思索が依拠すべき出発点として前提ないし想定  
されるものに関するカントの思想に、三種存することが明らかにな  
った。それら三種の思想に対応して、分析的方法そのものも三種に  
区別された。しかも、『プロレゴメナ』第四節・第五節では、相異  
なるそれら三種の分析的方法はただ並存しているだけであり、それ  
らを互いに関係づけることのできるような統一的方法は示されて  
いないのである。

## 五 方法の適格性

「いったい形而上学は可能であるか？」という「批判的問題」に  
取り組む思索の歩みを規定する二つの方法——総合的方法と分析的

方法——のいずれにおいても、「理性」による「理性」の解明、すなわち「理性」の「自己認識」に向かうようにとの指示がなされている。確かに、「理性」は認識一般の「源泉」・「原理」・「条件」であるが故に、「理性」が完全に解明されるに至るなら、その時はじめて、「学としての形而上学」が可能か否か、また可能ならどのような形而上学が可能か、等の問題に答えることができるであろう。それ故、「理性」による「理性」の完全な解明、「理性」の「自己認識」の完成は、右の「批判的問題」に答えつつ、できることなら「学としての形而上学」を新たに構築し、「理性」に「永続的な満足」を与えようと展望する思索にとって、当面どうしても到達しなければならぬ境地である、と言える。しかし、三種の分析的方法の各々に従う思索において解明される「理性」に焦点をあてて、各々の分析的方法を批判的に考察すると、分析的方法の限界、あるいは総合的方法に対する分析的方法の依存という局面が明らかになる。

まず、「純粋数学及び純粋自然科学」の認識のみを思索の依拠すべき出発点として前提すれば十分であるとすると、第一の意義での分析的方法について語るなら、この方法に従う思索は、当初より、ある種の狭隘さを伴う。というのは、その思索は、「純粋数学及び純粋自然科学」の認識の成立を可能にするに必要な「原理」として「理性」を解明できるにしても、そのような「原理」としても働く当のその「理性」が何であるかということ、十分には探求しないからである。第一の意義での分析的方法を実現する思索は、「理性」に由来する「所業」・「事実」の「実例 (Beispiel)」ないし「範例 (Exemplar)」にすぎないか、あるいは少なくともそのような「所業」・「事実」の全体であるとは確証されていないかのいずれかであ

る「純粋数学及び純粋自然科学」の認識との相対的な関係において、「理性」を解明できるにとどまる。それ故、その思索が「理性」の何であるかを記述しても、その記述が「理性」それ自身に過不足なく適中するとは言えない。仮に右の適中が生じたとしても、それは幸運な偶然によるものである他はない。

先にわれわれは、第一の意義での分析的方法を支える思想として、「所与なる」「純粋数学及び純粋自然科学」の認識を「可能ならしめる原理」から「他の」「純粋数学及び純粋自然科学」ではない、という意味」すべての認識の可能性」を「導出」することが可能であるとする思想を示したが、そもそもその思想が根拠を欠いていると言えよう。というのは、それら二つの学の認識を「可能ならしめる原理」とは異なる、「他の」認識を「可能ならしめる原理」、例えば「学としての形而上学」を「可能ならしめる原理」が存し、両方の「原理」がともに「理性」に所属するという事態も考えられるからである。従って、「いったい形而上学は可能であるか？」という「批判的問題」に十分な解答を与えるためには、どうしても、「理性」を完全に解明しておく必要がある。第一の意義での分析的方法を実現する思索は、この必要を満たさない。あるいは、偶然に恵まれこの必要を満たすことになるうとも、自らそのことを誤りなく自覚することはない。

第二の意義での分析的方法、つまり、思索の依拠すべき出発点として更に「自然素質としての形而上学」をも前提する「必要がある」とする分析的方法についても、原則的には同様の限界が指摘される。確かに、このような前提の追加によって、「純粋数学及び純粋自然科学」の認識との相対的な関係においてのみ解明される「理性」<sup>(44)</sup>と、すでに『純粋理性批判』第一版で解明された「理性」とを比較

する時気づく最も顕著な両者の間の相違の一つ、つまり、後者に見られる弁証論の部門が前者には欠けているという相違が、前者の後者への適合という仕方、事実上『プロレゴメナ』において解消されることにはなる。しかしながら、認識一般の「源泉」である「理性」の全体がすでに知られているというのでもないかぎり、「理性」の全体に見合うその「理性」の「所業」・「事実」をあらかじめ選び出しておくための統一的な基準を提供しうるような分析的方法というものは存在しない。これは、「すでに信頼しうるもの」として知られている何か或るもの」という語句が、思索の依拠すべき出発点として前提されるものを十分には規定することなく幾らか抽象的に指示しているにすぎず、多様な解釈を許していることから明らかである。従って、第二の意義での分析的方法を実現する思索も、「理性」の「所業」・「事実」の全体であるとは確証されぬまま事実上すでに己れの依拠すべき出発点として選び出されてしまっている前提との相対的な関係においてのみ「理性」を記述することができにすぎない。この記述が、「理性」の全体に過不足なく適中するとすれば、やはりそれは、幸運な偶然によるものだとしか言いようがない。

あるいは、右の適中が、すでに総合的方法に従う思索によって『純粹理性批判』第一版において説明されている——そして、そのような意味において、「すでに信頼しうるもの」として知られている——「理性」への意図的な適合によって生じることとも考えられる。だが、実際に、そのような意図的な適合が企てられたとすれば、それこそ、この分析的方法が単独では「理性」の完全な解明へと思索を導くことができないうことだけでなく、更に、この分析的方法が総合的方法に依存するということを意味するものである。

最後に、第三の意義での分析的方法を見てみよう。この方法の実現をめざす思索が、その出発点に、例えば「学としての形而上学」を「所与」であると想定し、このものの「条件」である「理性」の姿を描き出したとしても、ここに描かれた姿における「理性」の現実性が「理性」自身に即して証明されなければ、思索の出発点に想定された「学としての形而上学」の実際上の可能性や現実性は証明されない。ところが、その描かれた姿の「理性」が現実的であるか否かを「理性」自身に即して証明するためには、「理性」の「自己認識」の完成が要請される。従って、「学としての形而上学」の実際上の可能性の有無を問う問題に答えるための方法として、第三の意義での分析的方法も適格性を欠く。というのは、右の問題に十分な解答を与えるためには、この方法に従う思索は、総合的方法に従う思索に応援を求めざるをえないからである。第三の意義での分析的方法の限界は、論理的には、右のように要約できる。

実際に、『プロレゴメナ』の「プロレゴメナ」の一般的問題の解決——いかにして学としての形而上学は可能であるか?——という標題の項のもとでは、「形而上学が学として、単に欺瞞的な説得だけでなく、洞察と確信とを要求しうるために」なされねばならぬこととして、ただちに、「理性の批判」を遂行し「理性」の「自己認識」の内容を「一つの完全な体系」において明示することの必要が語られる。そして、その作業に携わる『純粹理性批判』について、引き続きその箇所、カントは述べている……。

「それ故、『批判』が、全くただ『批判』だけが、学としての形而上学を成立させうるための、よく吟味され確認された全計画を、いやそればかりでなくこの計画を遂行するすべての手段を含む。他の方途や手段によっては、学としての形而上学は不可能である」。

総合的方法を実現する思索としての「理性」の「自己認識」が完成する境地をいまだ見定めていない筆者は、右のカントの言葉の真実性を全面的に保証することはできない。しかし、カント自身次の点を認めていることだけは、すでに右の言葉から明らかである。すなわち、第三の意義での分析的方法に従う思索が「いかにして学としての形而上学は可能であるか？」という第四の問題に十分な解答を与えようとする時、その思索は、『純粹理性批判』の思索に、それ故また『純粹理性批判』の思索の歩みを規定する総合的方法に依存せざるをえない、という点である。

さて、本節の以上の考察により、われわれが区別した三種の分析的方法のいずれも、「理性」による「理性」の完全な解明、すなわち「理性」の「自己認識」の完成という境地へと、思索の歩みを確実に——幸運な偶然によってではなく——導いてゆくことはできないということ、そして、少なくとも第三の意義での分析的方法には総合的方法に対する依存が見られること、これら二点が明らかになった。それ故、たとえ「学としての形而上学」が可能であるとしても、その時、その形而上学の体系を構築して「理性に永続的な満足を与える」という究極的な目標は、『プロレゴメナ』第四節・第五節の記述から読み取られる三種の分析的方法のいずれの射程をも越え出る地点に存する、ということになる。

われわれは、本稿冒頭に、「いったい形而上学は可能であるか？」という「批判的問題」を挙げ、この問題に取り組む思索の歩みを規定する二つの「方法的手続き」——総合的方法と分析的方法——の存することを述べた。これら二つの「方法的手続き」のうち、「批判的問題」に取り組む思索をその究極的な目標へと導いてゆくこと期待できる「方法的手続き」として、今、われわれの手許には、ただ

一つ、総合的方法だけが残されている。これは、「どのような事実にもとづかず」、<sup>(54)</sup>「理性」のみを頼み、「自己認識」・自己規定 (Selbstbestimmung) の道を歩みつつ目標をめざすという、哲学的思索に固有の志向性を完全に発揮することを可能にする期待できる唯一の方法である。かくして、われわれは、総合的方法を実現する思索について、カントとともに語りうる。——「結局、純粹理性そのものの批判が試みられねばならないし、あるいはまたもし批判が現に存在するなら、それが研究され、一般的な吟味にかけられねばならない」。

『プロレゴメナ』は「予備 (Vorübungen)」である。『純粹理性批判』もまた「予備学 (Propädeutik, Vorübung)」である。だが、ともに予備的考察であるとはいえず、両者の間には、前者が後者の「冗長さ」や「不明瞭」を「除去する」という相違があるだけではない。『プロレゴメナ』は、「学としての形而上学」のための唯一の「予備学」——*Vorübung sg.*——として位置づけられている『純粹理性批判』の研究へと読者の関心を転じ促す予備的諸考察——*Vorübungen pl.*——である<sup>(55)</sup>ことを通してはじめて、<sup>(56)</sup>「学として現われうるあらゆる将来の形而上学のためのプロレゴメナ」となることができるのである。それ故また、『純粹理性批判』の「冗長さ」や「不明瞭」を「除去する」と言われる『プロレゴメナ』の思索を、その究極的な目標——「学としての形而上学」を構築し「理性に永続的な満足を与える」こと——に向けて正確に解釈するためにも、「冗長さ」や「不明瞭」を伴う『純粹理性批判』の研究に携わらなければならぬのである。

註

著者及び記号のなすレキヤント。『純粹理性批判』の引用・参照は、一七八一年第一版(A)の一七八七年第三版(B)の頁数による。カントの他の著作の引用・参照は、マナッシー版カント全集(AA)の頁数のローマ数字の巻数、マヌマン数字とその巻の頁数を示す。

(1) Prolegomena zu einer jeden künftigen Metaphysik, die als Wissenschaft wird auftreten können, 1783 [Prolog. へ註記], AAIV, 271 u. 274.

(2) Kritik der reinen Vernunft [Prolog. KrV. へ註記], AXII.

(3) Prolog., AAIV, 274-5. KrV., AVIII-XII.

(4) Prolog., AAIV, 271.

(5) Prolog., AAIV, 275.

(6) Prolog., AAIV, 365. vgl. KrV., A856, B884.

(7) vgl. Prolog., AAIV, 274-5.

(8) Prolog., AAIV, 274.

(9) Prolog., AAIV, 274-5.

(10) 『プロロゲメナ』第四節・第五節における分析的方法の多義性及び総合的方法に対する分析的方法の依存について、マキナムが言及している。同マキナムの解釈の仕方、本稿とは異なる。  
cf. Robert Paul Wolff, Kant's Theory of Mental Activity, 1973, pp. 44-54.

(11) 本稿第一節で引用した箇所——注(8)——を参照せよ。  
(12) vgl. KrV., AXIV.

(13) KrV., AXI. vgl. KrV., A735, B763; A849, B877. vgl. auch Prolog., AAIV, 317.  
(14) KrV., AXI-XII.

(15) vgl. Kritik der praktischen Vernunft, 1788, AAIV, 12.  
(16) Prolog., AAIV, 272.

(17) 「必なるもの」と言うのは、『純粹理性批判』が完結しても「理性」の「自己認識」が未完成であるという事態の可能性を、まだ筆者は否定しきれなからのである。

(18) 本稿第一節で引用した箇所——注(8)——を参照せよ。

(19) Prolog., AAIV, 280.

(20) Prolog., AAIV, 275. ここで紹介したカントの思想の正確性そのものが

は問わなう。

(21) 引用箇所中の「」内は筆者による補足である。以下も同様。  
(22) Prolog., AAIV, 275.

(23) 「他のすべての認識の可能性」が「導出」されれば、その時、「学としての形而上学」の可能性が明らかならなる。なまかなら、「学としての形而上学」が可能であれば、その可能性もその時「導出」されることになる。またその時「学としての形而上学」の可能性が「導出」されなければ、元来それは不可能なものである。

(24) Prolog., AAIV, 279-80.

(25) 「学としての形而上学」が「自然素質」は、先の引用箇所——注(24)——では、単に「純粋な理性能力」を指す (vgl. KrV., B22.) のではなく、或る種の「フ・フ・フ・フ」を指していた。それ故、KrV., B21-2を説明される意味で「自然素質としての形而上学」と言うべきである。 vgl. Prolog., AAIV, 365, 327-8 Anm. vgl. auch Hans Vaihinger, Kommentar zu Kants Kritik der reinen Vernunft, Neudruck der 2. Auflage Stuttgart 1922, 1970 [Prolog. Kommentar へ註記], Bd. 1, S. 369.

(26) Prolog., AAIV, 230.

(27) Prolog., AAIV, 365.

(28) Prolog., AAIV, 230.

(29) 「四つの問題」を表現する各々の疑問文が、そのまゝ Prolog., AAIV, 280, 294, 327, 365 の各頁で始まる各篇なうし項の標題として採用される。

(30) 先の引用箇所——注(24)——を参照せよ。

(31) 他方、『純粹理性批判』の構成は、Subordination の秩序による。Subordination の相違は、二つの著作における体系の有無とその相違を示唆する。

(32) 『純粹理性批判』は、第三版ではじめてその緒論をおおむね「四つの問題」をなす (vgl. KrV., B19-24)。だが、分析的方法に従う思索は、「四つの問題」によって、自ら依拠すべき出発点を与えられるに對し、総合的方法に従う『純粹理性批判』の思索は、この思索が「どのようなる事実にもとくかすた」『理性』の「自己認識」として展開してゆくその過程の中で、結果的に「四つの問題」に解答を与えようとするのである。



## Das methodische Verfahren der Selbsterkenntnis

### —Das synthetische Verfahren und das analytische Verfahren—

Takashi KITAOKA

#### Zusammenfassung

Mit der „kritischen Frage“ nach der Möglichkeit der Metaphysik als Wissenschaft verfährt Kant in der *Kritik der reinen Vernunft* synthetisch und in den *Prolegomena zu einer jeden künftigen Metaphysik, die als Wissenschaft wird auftreten können* analytisch.

Kants Aussagen — in §4 und §5 der *Prolegomena* — von den zwei oben angezeigten Verfahren betrachtend, beweise ich mit dieser Arbeit, daß das analytische Verfahren der *Prolegomena* in drei verschiedene Arten nebeneinander geteilt ist, und demonstriere anschließend, daß jedes Verfahren der drei Arten dazu unfähig ist, die „kritische Frage“ genügend zu beantworten, während das synthetische Verfahren der *Kr. d. r. V.* dazu fähig sein mag.

Daraus erhellt folgendes: die *Prolegomena* können erst dann in wahren Sinn als *Prolegomena zu einer jeden künftigen Metaphysik, die als Wissenschaft wird auftreten können* erscheinen, wenn sie für Vorübungen zur *Kr. d. r. V.* gehalten werden. Denn die *Kr. d. r. V.* mag die einzige Propädeutik (Vorübung) zur Metaphysik als Wissenschaft bedeuten.